

Title	書評：鈴木正崇著『山岳信仰： 日本文化の根底を探る』中央公論社(中公新書)、2015年
Sub Title	
Author	由谷, 裕哉(Yoshitani, Hiroya)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2016
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.21 (2016. 7) ,p.114- 118
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20160702-0114">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20160702-0114</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

---

書評：鈴木正崇著『山岳信仰 日本文化の根底を探る』

中央公論社（中公新書）、2015 年

由谷 裕哉

---

慶應義塾大学名誉教授、日本山岳修験学会会長である著者による、新書本である。「日本文化の根底にある山岳信仰を概観し、各地の個性ある山々の信仰を取り上げ、日本人にとって山とは何かを探求する」(ii 頁) ことが出版の目的とされ、さらに、「人間は自然とどのように対峙し交感しあうのか、自然とのいのちの共有をどのように自覚するのか」(iv 頁) の解明が目指されている。

本書の構成は以下の通りである。なお、章ナンバーは漢数字が使用されているが、本稿が横書きの体裁であるため算用数字で転記したい。

序章 山岳信仰とは何か

第 1 章 出羽三山—死と再生のコスモロジー

第 2 章 大峯山—修験道の揺籃の地

第 3 章 英彦山—西日本の山岳信仰の拠点

第 4 章 富士山—日本人の心のふるさと

第 5 章 立山—天空の浄土の盛衰

第 6 章 恐山—死者の魂の行方

第 7 章 木曾御嶽山—神がかりによる救済

第 8 章 石鎚山—修行から講へ

見られるように、序章以外は山名の後にサブタイトルが付いている。第 1 章から第 3 章では、三大霊場とされる出羽三山（山形県）、大峯山（奈良県）、英彦山（福岡県・大分県）について詳述され、第 4 章以降は、それ以外の地方霊山が課題となっている。

まず序章では、山岳信仰とは何かが旧来研究を考慮しつつ纏められている。神仏習合との関わり、水分の山、狩猟民の山の神、山中他界観、山麓および山頂での祭祀から登拝へ、山岳寺院の開創（最澄と空海）、修験道の成立と展開、近世以降の山岳登拝の民衆化、女人禁制、修験が関わった芸能、文化遺産化、などがサブテーマとして論じられている。修験道があくまで議論の一要素に留まること、女人禁制や文化遺産の問題、および近世以降の山岳登拝講への関心は、本書において一貫した方向性となっていると思われる。

第 1 章は、月山・羽黒山・湯殿山という出羽三山をとりあげている。東北における仏教伝播

(徳一、円仁、空海など)や三山の由来(他に葉山や鳥海山を当てる例など)が冒頭で触れた後、三山それぞれの聖地と宗教史が述べられる。続いて江戸時代の三山詣、湯殿山の即身仏、開山伝承とその変化(能除太子、参拂理大臣、蜂子皇子ほか)が説明され、四季の峰、とくに秋峰と松例祭を含む冬峰が、詳しく解説される。章末に現代の動きの一環として、秋の峰で女人禁制が部分的に維持されていることが記されている。

第2章では、修験道揺籃の地とされる大峯山が課題となっている。章の冒頭で大峯山とは吉野から熊野に至る山塊の総称であること、金峯山・金御嶽との関わり、宮滝が行幸の地であったことが触れられる。続いて金峯山で修行した役行者ほかの行者、蔵王権現が修験道の本尊となったこと、末法思想により経典の埋納が行われたこと(経塚)、浄土信仰とも関わって御嶽詣が12世紀頃には熊野奥駆けにつながったこと、その熊野との関わり(園城寺増誉が熊野三山検校に)、聖宝や道賢らの修行、熊野詣の隆盛と大峯縁起などが説明される。さらに、増誉の熊野三山検校に端を発して、室町時代頃までに聖護院を中心とする修験教団である本山派が形成されたこと、明治以降の修験道廃止を経て、現在は三つの教団と在俗者による各講社によって大峯山寺が支えられていること、平成16年(2004)に大峯山も含まれる「紀伊山地の霊場と参詣道」がユネスコの世界遺産に登録されたこと、などが述べられる。章の後半は史料と現在の執行によりながら、峰入りの詳細およびその思想が解説されている。

第3章は、九州の山岳信仰の拠点である英彦山をとりあげている。章の冒頭では、三峰の三神が祀られて彦山三所権現と呼ばれ、神宮寺が霊仙寺であったこと、享保14年(1729)から表記が彦山から英彦山に変わったこと、中世に遡る史料が多く残されていること、などが述べられる。続いて、『鎮西彦山縁起』(善正と藤原恒雄、白鹿と鷹、三女神など)と『彦山流記』(開山である善正、天竺から震旦を経ての彦山権現の垂迹、四十九窟の由来など)に見える開山伝承、鎌倉時代には洞窟への参籠が修行の中心であったこと、中世における信仰圏の広がり(謡曲での言及など)、峰入りが南北朝以降に盛んになったこと(山中の聖地、組織、松会ほか)、阿吸房即伝による修行の体系化など、中世に関して本書の中でも詳しく論じられている。近世以降については、聖護院との本末争いの結果、元禄9年(1696)に天台修験別格本山の地位を得たこと、集落が四土結界思想に基づいて立地していたこと、および江戸時代の中心行事であった松会の詳細が解説され、章末に明治の神仏分離以降(霊仙寺座主は英彦山神社宮司に、全ての山伏は還俗、松会の一部が周辺に残存、など)が紹介されている。

第4章では日本の最高峰である富士山について、章の前半で縄文時代の遺跡からうかがえる信仰、万葉集での描写、噴火の歴史、都良香の『富士山記』における記録(浅間大神を祀るなど)、『本朝世紀』などに載る末代上人の登拝、中世における縁起(『浅間大菩薩縁起』など)とそこでのかぐや姫伝説との関わり、中世以降の富士山南麓での村山修験の展開、などが語られる。章の後半では、近世以降の長谷川角行らによる富士講、および幕末から明治以降にその影響を受けて成立した教派神道(丸山教と扶桑教)について詳しく説明され、章末では富士山が平成25年(2013)に世界遺産に登録されたことに関連して、構成遺産に含まれる巡礼道などが

紹介されている。

第 5 章は、北アルプスの中で古くから山岳信仰の対象とされた立山をとりあげている。万葉集や延喜式神名帳での記述、近年の映画『劔岳 点の記』で有名になった劔岳山頂付近で発見された平安初期頃の錫杖、『法華験記』や『今昔物語集』で描かれた山中地獄とそこからの救済、開山伝承（佐伯有若、熊が阿弥陀如来に変身）、芦峯・岩峯をはじめとする山麓の寺院および集落などが、章の前半で説明される。章の後半では、江戸時代における芦峯・岩峯両寺を中心とする一山の組織、衆徒による唱導に用いられたいわゆる立山曼荼羅、および芦峯時衆徒による布端灌頂が、近年の研究を踏まえて詳細に紹介されている。

第 6 章は下北の恐山に焦点が当てられ、章の冒頭で平成 23 年（2011）の東日本大震災の後、遺族が恐山を訪れてイタコの口寄せを聞くことが増え、恐山が蘇ったことが触れられている。続いて山内の宗教施設と死者供養との関わり、歴史と伝承（円仁の開創、地蔵菩薩の靈験など）、江戸時代の状況（菅江真澄の参詣など）、姥神との習合とそれに伴う婆講の成立、近世に恐山を支配した曹洞宗円通寺による民間信仰の組織化（地蔵講など）、奥の院であった釜伏山への登拝習俗には修験の影響もあること、などが述べられている。

第 7 章では、平成 26 年（2014）に噴火し、多くの死者・行方不明者を出した木曾御嶽山がとりあげられている。章の冒頭で、木曾御嶽山は噴火前には日本で最も信仰登山が盛んであったこと、その特徴は、御嶽講の一般信徒による修験の影響が薄い山岳登山がある一方で、講社の行者（御嶽行者）による、「前座」が「中座」に神降ろしをして託宣させる「御座」なる御嶽講独自の儀礼があること、複数の登山道に沿って亡くなった行者の「霊神碑」が林立していること、などが説明される。続いて山内の景観や聖地、御嶽（おんたけ）の名の由来（王御嶽から、という説など）、登山が史料で確認できるのは室町後期以降であること、江戸中期までは重潔齋が必要であったこと、などが述べられる。さらに、軽精進での登山を行った覚明による中興、江戸の修験者・普寛による「御座」の開創、泰賢ら普寛の弟子たちによる御嶽講の展開、明治以降に御嶽講を基盤として御嶽教や木曾御嶽本教が作られたこと、ローエル、ウェストンら外国人による登山の記録が述べられ、章末に御嶽講の現状が解説されている。

第 8 章では、西日本の最高峰である石鎚山が扱われている。ほぼ独立峰であるため古くから信仰を集めてきたこと、寂仙による開山伝承、山麓の前神寺・横峯寺などの開基伝承（寂仙と類似した名の行者の他、役行者）、東にそびえる瓶ヶ森との関係、空海の修行伝承、役行者の五代・芳元による石鎚開山の伝承（『諸山縁起』）とそこに表出する修験の影響、鎌倉時代以降は前神寺が山頂にある石鉄蔵王権現の別当寺であったこと、などが中世までに関して述べられる。さらに、江戸時代中期以降に一般民衆の石鎚登山が始まり、「お山講」と呼ばれた講中の組織化に前神寺と横峯寺が関わったこと、両寺は四国遍路の札所でもあり、石鎚信仰は四国遍路と相まって民衆に広まったこと、明治の神仏分離によって石鉄神社が成立したこと（のち石槌神社に改称）、近世から現在に至る「お山開き」の概観、女人禁制が現在も一部残っていること、などが述べられる。章末では、江戸中期以降、明治の神仏分離を乗り越えて民衆の石鎚信仰を支

えた原動力として、石鎚講の実態が詳しく紹介されている。

以上概観してきたように、本書はとりあげられている霊山それぞれに関して、最新の研究動向を踏まえた詳細な解説がなされていると考えられる。著者の旧著『女人禁制』（吉川弘文館、2002年）にも見られたように、かなり難解な観念を含む事象であっても、一般向けに分かりやすく解説されている。多くの章で近世以降の動きがかなりのページ数を裂いて説明されているのも、こうした研究領域としては斬新なのではないだろうか（修験道研究は、かつては中世が主流であった）。著者の羽黒山秋峰や大峯奥駆け体験が叙述に反映されているのも、素晴らしい。さらに、多くの章で現代との関わりが考慮されていること（3.11、噴火による死傷者、世界遺産登録や文化財の国指定のような文化遺産化の動きなど）にも、注目すべきであろう。

とはいえ、本書評が掲載されるのは社会学の学会誌であるので、社会学を学ぶ人間にとって本書を読む意義、といったテーマについて以下考えてみたい。評者が愚考するのは、本書が修験道研究における近年の動向、とくに中央の修験道教団（本山派など）の地方への展開に関する直近の研究に関して、代案を提起しているのではないか、ということである。

修験道研究の始まりを明治末に刊行が始まった雑誌『神変』に求めるとするならば、同誌が醍醐寺から出されていたように、幕末まで存在した修験道教団を回顧し復活を希望する中で、研究が草創したと考えられる。修験道研究を大成したと考えられている和歌森太郎『修験道史研究』（1943年）も、修験道を中世的宗教と位置づけたうえで、その教派的な形態（本山派・当山派）の成立を主な課題として論じていた。

ところが、戦後における地方史研究一般の進展に加え、1970、80年代に高度成長終焉以降のオールターナティブを求める一環として修験道が注目されたこと（五来重の修験道を縄文時代や滅罪信仰と結びつける論など）、また名著出版から『山岳宗教史研究叢書』が刊行され、その第2期が地方編になったことなどが相まって、教団形成に関心が集約されていたこれまでの修験道史研究とは懸隔のある、地方における修験が研究の対象として注目されるに至った。このような研究動向に対して例えば中世宗教史の長谷川賢二は、それらを地方霊山の一山組織を無前提に修験道と見なすような動向であるとして、一貫して批判してきた（長谷川「修験道史のみかた・考え方」、『歴史科学』123、1991年、など）。

長谷川の主張を咀嚼すれば、1990年代頃までは、中央の修験道教団との関わりや地方霊山の一山組織の分析を等閑視し、地方の霊山毎に必ずその山独自の修験道が存在した筈、と見る枠組が研究者の側に前提されていたのではないか、ということであろう。しかしながら今世紀に入って、本山・当山のような修験道教団の地方への展開と各地域との関わりに関して、本格的な研究が行われるようになってきた。その代表格は、修験道研究の大家である宮家準の大著『修験道の地域的展開』（春秋社、2012年）の出版であろう。先に参照した長谷川賢二も、本書刊行に遅れたものの地方の側として阿波国を事例として、『修験道組織の形成と地域社会』（岩田書院、2016年）を上梓している。

卑見によれば、本書『山岳信仰』は、前世紀までの中央の修験道教団との関わりや地方霊山の一山組織を追求しない地方修験の研究と一線を画すのはもちろん、近年の宮家や長谷川による修験道教団の地方展開に関する本格的な研究に対しても、代案となっているように思うのだが、いかがだろうか。

評者がこのような印象をいただくのは、本書第 4 章以降の事例の選び方に拠る所が大きい。中では石鎚山 (第 8 章) が修験との関わりが深いと思われるが、それでも土地柄から四国遍路との関わりや、道者を率いる石鎚講の影響力が近世以降は大きいと考えられる。反対に、主要な聖地を管理していたのが曹洞寺院であることから最も修験と関わりが薄いと考えられる恐山 (第 6 章) でも、奥の院までの登拝習俗に修験の影響があることが指摘されている (214 頁)。立山 (第 5 章) の場合は、中世までの修行を具体的に伝える史料が不在なだけではあるが、芦峯・岩峯の衆徒は少なくとも幕藩体制下では天台宗の僧侶であったと考えられる。

富士山 (第 4 章) は南麓に村山修験が存在したが、北麓を主体に展開した富士講は、開祖と見なされる角行が大峯山で修行したといわれるものの (146 頁)、その人穴での立行 (角材の上に長年立ち続ける行) などは修験道とは関わりのない、独自のものであろう。木曾御嶽山 (第 7 章) の場合も、とくに普寛は江戸の本山派修験であったが、彼が始めたともいわれる御座は、(修験道の憑祈禱に発すると言われるものの) やはり修験道とは異なる独自の儀礼と考えられる。

以上のように、本書第 4 章以降にとりあげられた五つの霊山は、それぞれ濃淡の差があるとはいえ、教派的な修験道 (本山・当山) の地域的展開という枠組では位置づけることができない事例として、選ばれているのではないだろうか。修験道研究の進展という観点から見れば、その意味で本書は、とくに第 4 章以降の地方霊山に関して全く新しいアプローチを提示していると捉えることができよう。あるいは、このように主要な地方霊山においてさえ、本書が示すように修験道との関わりが副次的なものに留まるのであれば、修験道研究全般にも見直しが求められるのかもしれない。

いずれにしても本書は、山岳信仰という日本の宗教文化の一端に関して、斯界の最先端の知見が網羅されているだけでなく、これまでに無かったような観点から議論が展開している画期的な書物であろう。

(よしたに ひろや 小松短期大学)